

苦難を乗り越えて

— 明治23年の水害 —

昨年6月初めに、越谷市でも浸水する出来事がありました。

関東は古来、治水が大きな課題でした。今でこそ市域の堤防が決壊することはありませんでしたが、昭和30年代までは一生の間に何度も床上浸水を経験することは珍しくなかったのです。今回の展示はそのことについて共に思いを致し、先人から学ぶ機会にしたいと考え、企画しました。

1 水防建碑宴会図

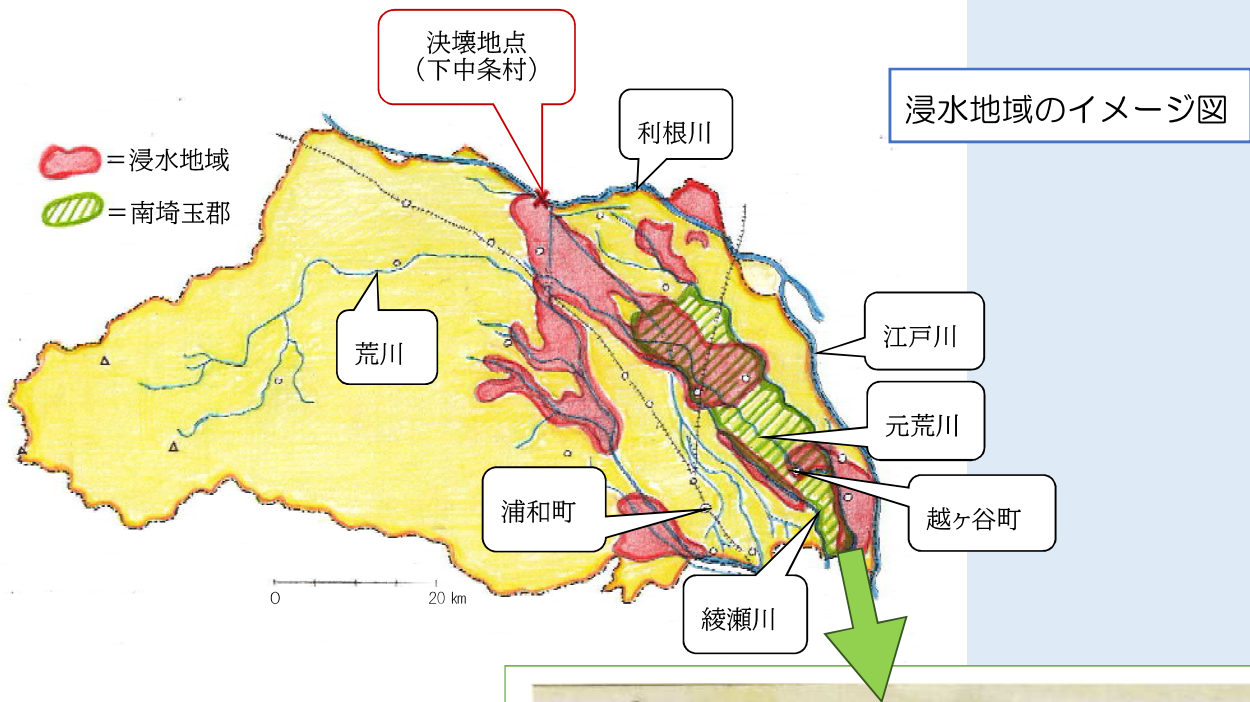


4人が楽しそうに宴会をしています。彼らはそれぞれある言葉を表しています。右から「すめばう（すいぼう）＝水防」、「古ん志ん（こんしん）＝懇親」、「けんぴ＝建碑」、「をけはち＝桶八（?）」です。そしてこの4人の上には、その言葉に因んだ五七調の文があります。

これは大水害の爪痕を復興させて、それを記した石碑を建てたことを祝っていることを表現したものです。当時の人々は後世に何を伝えようとしたのでしょうか・・・

その水害とは、明治23年（1890年）8月に埼玉県東部を襲った災害でした。

2 浸水図



『埼玉県水災概況』

(宮内庁宮内公文書館蔵)

明治23年8月の水害による被害状況について、県内各郡から当時の宮内省に報告がなされたものがこの史料です。上のイメージ図はそれをもとに作成したものです。右の絵図は越ヶ谷地域を含んだ南埼玉郡からの報告に添付されたもので、色の濃い部分が浸水地域です。



3 市域の被害状況

洪水の経過

8月22日：激しい降雨が翌日にかけて続いた。

8月23日：北埼玉郡須加村下中条（現・行田市）の利根川堤防が59間^{けん}（約106m）にわたって決壊。

23日以降：現・越谷市大林地区の元荒川堤防が26間（約47m）決壊。
同、大沢町の元荒川堤防決壊。

葛西用水が溢水^{いっすい}（水が堤防を越えて溢れること）。

二郷半領^{にこうはん}の木売^{きうり}（現・吉川市）の古利根川（中川）堤防決壊。

27日以降：越巻地区で綾瀬川溢水。綾瀬川に水を流下させた。☞パネル④、及び「配布資料」参照

現市域の旧町村別浸水被害一覧（「埼玉県水災概況 明治23年」『宮内庁宮内公文書』より作成）

当時の町村名	浸水日数(日)	浸水戸数(戸)	町村内戸数(戸)	被救助人員(人)
越ヶ谷町	20	17	618	46
大沢町	20	320	423	1384
川柳村	15	14	144	93
大相模村	15	10	275	53
蒲生村	15	21	404	13
出羽村	15	21	—	78
増林村	20	470	614	1572
新方村	20	175	324	781
桜井村	20	156	383	487
大袋村	20	137	306	324
荻島村	15	24	176	15
現市域全体	15～20	1365	3667 (出羽村を除く)	4846
南埼玉郡全体	15～25	4693	—	17588
埼玉県全体	—	26195	—	—

※＝表中の「町村内戸数」は『越谷市史 二』による。出羽村は不明。

浸水日数が2週間～3週間以上という長さでした。まだ電気が通っていなかったの
で、現代のような排水ポンプ
がなかった時代です。

現市域になった町村全体での浸水戸数は1365戸にも
なりました。救助された人は
4846人になりました。

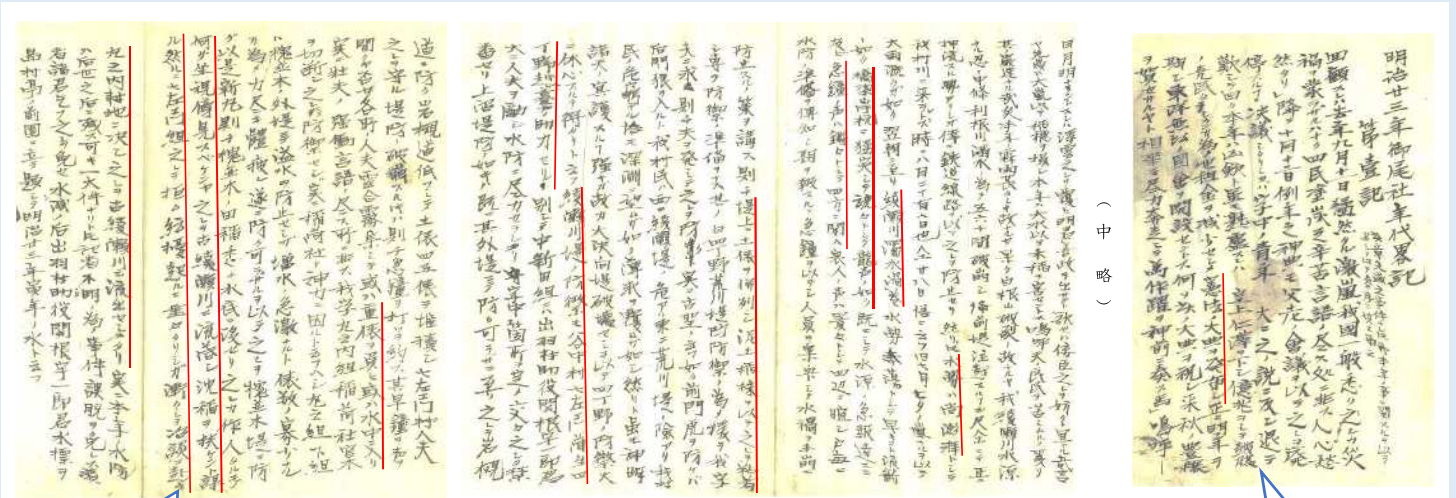
【参考文献】

- ・「埼玉県水災概況 明治23年」『宮内庁宮内公文書』
- ・『越谷市史 二』
- ・『葛西用水史』
- ・『越巻中新田の産社祭礼帳』

4 人々の奮闘

この地域にまだ鉄道や電気が通ってなかった時期、大きな水害に対して先人たちはどのように捉え、立ち向かったのでしょうか。

地域の史料からその様子をご紹介します。



(中略)

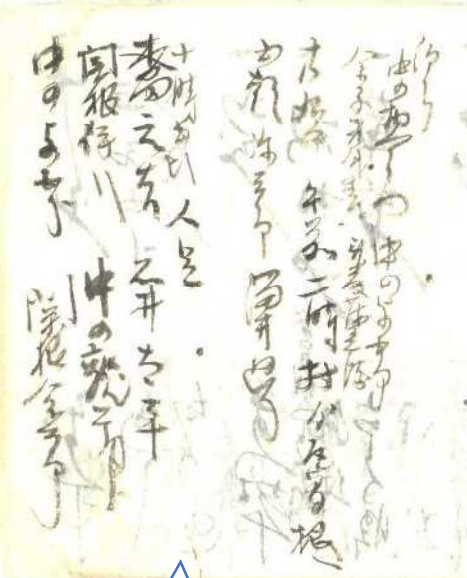
「溢れた水で実りかけている稲穂が水没していくのを座視できず、古綾瀬川に水を落とそうとしたが下流の集落では認めなかったの、騒動になりそうだったが、話し合って自分たちの集落から落とすことにした」と、あります。

おびしやさいれいちょう 越谷市指定文化財「越巻中新田の産社祭礼帳」(個人蔵)

綾瀬川左岸、旧越巻村の「産社祭礼帳」は370年もの間、書き綴られている年代記です。今なお、毎年書き足されています。今回は地域の方のご了解により、この一部をご紹介します。

明治23年の水害についてはその凄まじさや人々の水防活動、そして近隣の集落との協力と利害対立なども記されている貴重な記録です。(特に赤色傍線部をご覧ください。)(配布資料ご参照下さい)

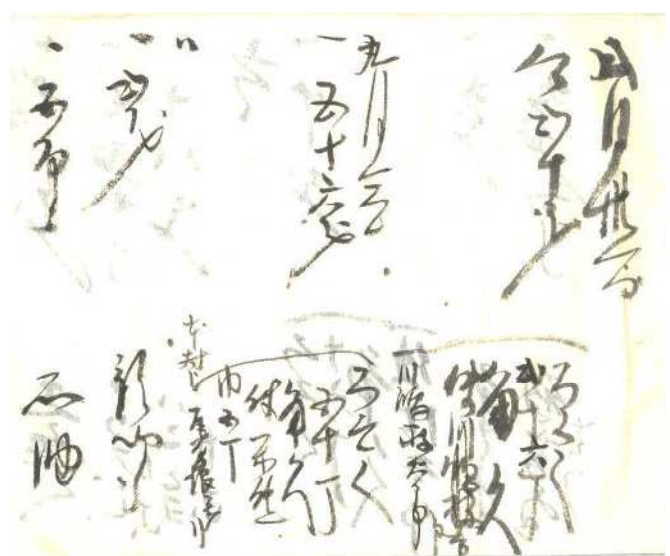
この水害の前年には大きな台風で塗炭の苦しみだったことや、大日本帝国憲法が公布されたことが記されています。



午前2時に瓦曽根溜井を巡回したことや、10時頃に動員された人々の名前が記されています。

「日記」(個人蔵)

旧蒲生村の有力者が書き残したものです。水防のための出動やその人々、揃えた用具、車(人力車?)で駆け付けたことなどが記録されています。



水害発生から1週間以上経っても、ろうそくなどの物資を購入して水防、復旧活動に当たっていた様子が記録されています。

5 建 碑



瓦曾根溜井防水記念碑

水害復旧後の明治26年（1893年）に地元の人々が建てた石碑です。題字は「日本近代郵便の父」と呼ばれた前島密によるものです。最初のパネル①「水防建碑宴会図」はこの石碑に関するものです。

【現代文要約】

明治23年(1890)8月上旬から雨多く、22日に大風雨となり、23日に下中条で利根川の堤防が決壊した。(現越谷市域は)元荒川や葛西用水の大洪水となった。瓦曾根溜井では水位が上昇し、溜井の堤防が決壊すると下流域の東京が水没してしまうことから、東京からも応援の人々が駆け付け、警鐘を鳴らし篝火を焚き昼夜土俵積みを行い、防御に努めた。古利根川左岸の木売で決壊して、こちら側は難を免れた。



自然災害伝承碑

自然災害の歴史を学び、その教訓を未来に伝えるために、国土地理院が2019年（令和元年）にこの地図記号を制定しました。越谷市西方にあるこの石碑も地形図の中に記されています。

おわりに

現代よりも国や都道府県の治水が十分ではなかった明治期、さらには電気や鉄道も通っていない中では、地域の人々は自ら人力で水防にあたるしか有効な方法がありませんでした。だからこそ村同士、集落同士の共同が必要だったのですが、水防の場合には利害が対立することも珍しくなかったことが史料にも表れていました。時にはそのことによる犠牲もありました。

これらのことを乗り越えて懸命に地域を守ろうとした先人たちが建てた石碑やその他の史料から学ぶものは、とても深くて大きいものです。ご高覧いただき、誠に有難うございました。